

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00113

研究課題名(和文)近代日本の大衆演芸ジャンルにおける音楽と芝居の交叉とその変容 節劇・俄・音曲漫才

研究課題名(英文) Crossing encounter of music and theatre and its transformation in popular performing arts of modern Japan: Fushi-geki, Niwaka, Ongyoku-manzai

研究代表者

園田 郁 (Sonoda, Iku)

大阪大学・中之島芸術センター・特任研究員(常勤)

研究者番号：60772241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代日本に展開した大衆向けの舞台芸能のうち、節劇、俄、音曲漫才を取り上げ、それぞれの上演(興行)活動における相互的な影響関係(流用化・交流)の把握・解明を目指した。主に九州北部および大阪での活動を調査対象とし、文献資料調査および聞き取り調査を通じて、それぞれの地域で各芸能が演目内容や演者の交流など様々な領域で相互に影響関係を与えあっていることを見出した。これらは都市部における節劇の展開が地方に引き継がれる過程で、俄やその後に現れる浪曲漫才に影響を与えた動きとしても捉えられ、地域およびジャンル横断的視点から近代の大衆芸能の興行史についての新たな理解の可能性を示したものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題で対象とした芸能(特に節劇、浪曲漫才)は、これまで主要な種目の派生的な形として受け止められ、十分な関心が向けられてこなかった。しかし、本研究の成果として得られた、芸能の相互的な影響関係は、近代日本の興行実態が個別のジャンル史の列挙ではなく、それらの相互的な影響関係を含みながら形作られていることを明らかにした。このことは、近代日本の芸能興行史に新たな理解の可能性を促すものである。加えて今回の対象は都市部だけでなく、地方を含めた広い領域で捉えたものであり、近現代の興行史研究を地域研究という領域で捉えることに貢献すると考えている。

研究成果の概要(英文)：This research subject aimed to examine mutual influences among popular performing arts, Fushi-geki(Naniwabushi-shibai), Niwaka, Ongyoku-manzai, which expanded in modern times of Japan. Interview survey and documentations research focused on northern part of Kyushu and Osaka revealed that each performing arts gave some impacts with one another on various aspects such as performers and program contents. These also show new aspects that Fushi-geki's expansion to local area led to appearance of Niwaka and Rokyoku-manzai afterwards, in terms of cross-regional and cross-genre viewpoint in the history of performing arts of modern Japan.

研究分野：音楽学

キーワード：大衆演芸 語り芸 喜劇 音曲

1. 研究開始当初の背景

近代日本において創始された語り芸である浪花節(浪曲)は、レコードやラジオといったマスメディアの発展とともに、大衆文化の生成に大きな役割を担ってきた。その影響は、小説や映画、流行歌など様々なジャンルを巻き込む、きわめて広範囲なものである。このような事態は、近年の研究成果『浪花節の生成と展開 語り芸の動態史にむけて』(真鍋 2020)としても示され、近代の大衆文化における浪花節の位置づけ・意義が更新されつつある。しかしながら一方で、他ジャンルとの関わりのうち、とりわけ浪花節の影響がより直接現れている領域についての研究は十分には進んでいない。『忘れられた演劇』(神山 2014)では、当時多くの庶民に親しまれたものの一つとして、浪花節と結びついた芝居「浪花節芝居」(節劇)が取り上げられているが、上記の著書を含め、この芸能への研究はほとんど行われていない。

このような状況のなかで、研究代表者は、これまで近代日本において上述の浪花節芝居を含んだ、語り芸と芝居の結びつきによって生じた芸能をいくつか取り上げ、興行、演者、受容状況などからそれらの具体的かつ包括的な解明に取り組み、一定の成果を得た(園田 2015、2018、2019 他)。しかし一方でこれらの芸能の展開は、それぞれ個別に捉えるよりも、関連する種目・ジャンルの相互的な交流・繋がりの中で成り立ち、一つの大きな動態として捉える必要性も見出された。本研究では、そうした問題背景を踏まえ、語り芸と結びついた芝居(とりわけ喜劇)のうち、特に関連性の深い芸能群を一つの対象として定め、それが単なる語り芸の派生ではない、「音楽と芝居の文化」そのものとして形作られ/変容してきたことを明らかにし、その上で、そうした芸能の動態が、近代日本の大衆文化の生成・展開において中心的な役割を担っていることを示せると考えた。

2. 研究の目的

本研究が取り組んだことは、芝居と語りとの結びつきによって成り立つ三つの芸能、1. 節劇(浪花節と芝居) 2. 俄(音曲芝居のパロディ化) 3. 音曲漫才(浪花節などの語り芸と話芸の組み合わせ)を取り上げ、それぞれの上演形態、演者の活動の在り方を明らかにした上で、上演(興行)活動における相互の影響(流用化・交流)を把握・解明することである。そのために主に以下の三つの問題、九州地域(特に福岡・熊本など九州北部)における節劇と俄の上演活動、大阪における俄と節劇の興行活動、および両者の交流、昭和初期から戦後にかけて俄と関係のある音曲漫才の演者を対象に、双方の演者の動向に基づく俄と音曲漫才の関係性およびその変遷、についての実態解明に取り組んだ。

3. 研究の方法

本研究では、研究計画の段階において文献資料や聞き取りによる調査のほか、音源や映像資料も調査考察の資料として検討していたが、現地調査で関係者への聞き取りを実施するなかで、多くの関連情報を得ることができたため、映像資料、音源資料よりも、文献資料と聞き取り調査を中心に研究活動を進めた。研究課題の遂行にあたり設定した三つの問題は以下のとおりに進めた。九州地域(特に福岡・熊本など九州北部)における節劇と俄の上演活動については、主に各地域での当該の芸能を概観した文献資料の収集および整理を行い、より具体的な情報収集のために各地域の地方紙から興行記録の抽出を行った。また肥後にわかについては、実演者に対しての聞き取り調査を実施した。大阪における俄と節劇の興行活動における交流については、特に節劇(浪花節芝居)に関して「近代歌舞伎年表」などの興行記録に関する基礎資料を土台としてその他の上演活動に関わる文献資料を加え、大阪における興行活動の全体像を把握した上で、大正期から昭和前期にかけての、上演形態、演者(浪曲師(浪花節の語り手))の動向と興行の変遷と関係を中心に考察を進めた。また俄については、現在も俄が伝承される河内地域で現地調査を行い、文献資料の収集のほか、にわかの実演者および関係者への聞き取り調査を実施し、浪花節芝居や音曲漫才との交流に関する情報収集を行った。昭和初期から戦後にかけての俄と関係のある音曲漫才の演者については、特に大阪地域を中心に、文献資料および関係者の聞き取り調査を行い、俄に関しては上記と同様に河内地域で聞き取り調査を行ったほか、大阪市内においては、芸能の実演者、興行に関わる関係者、演者の関係者など複数の幅広い対象に聞き取り調査を実施した。三つの問題を軸として進めた研究は、代表者および分担者の役割を踏まえつつ、研究計画として策定したものであるが、実際に研究を進めるなかでは、特に聞き取り調査において、一人の調査対象者から、と の芸能間の繋がりを示す情報が同時的に得られ、研究課題の目的である各芸能の相互の影響についての直接的な成果に至る場合もあった。

4. 研究成果

本研究課題の初年度は covid-19 の影響により現地調査が十分に実施できず、それまでに収集

した情報の整理や文献資料による情報収集を中心に進めたが、二年目以降は現地調査を行い、研究者と分担者での共同による研究調査、また同様に共同での研究成果の発表を実施することができた。

本研究課題において研究対象とした節劇（浪花節芝居） 俄、音曲漫才の三つの芸能については、おおまかに研究代表者と分担者の専門とする領域に応じて担当の役割をそれぞれ分けていたが、実際の研究調査では、個別の芸能を対象にした調査をすすめるなかで、研究課題の中心的な問題である三つの芸能の交流関係について具体的な繋がりを示す資料・情報がそのまま得られることもあり、結果的に本研究課題が目指した、各芸能の影響関係について一定の成果は得られたと考えている。そうした芸能間の交流関係は、演目の内容から演者の交流など、様々な次元で見出された。ただし、当初予定していた、三つの芸能の交流を広域的な範囲で全体像として把握することは、初年度の活動が十分に出来なかったこともあって、達成できた部分は多くない。以下では、節劇（浪花節芝居） 俄、音曲漫才（特に浪曲漫才） それぞれを対象とした研究成果を示すとともに、それらを整理しながら、今後の課題に向けた全体像の展望を示しておきたい。

浪花節芝居では、明治半ばから大正初期の都市部における浪花節芝居の興行を概観し論考に纏めた。この論考では浪花節芝居の上演形態が役者と浪曲師で構成されていることに注目し、その両者の組合せが浪花節芝居の興行の変遷に関わっていることを提示した（論文 園田 2023）。そこでは浪花節芝居が具体的に活動写真や連鎖劇といった種目に交じり変容していく姿も捉えられるが、そのなかには喜劇の形態で上演されることも見出せた。また九州地域（福岡、長崎、熊本）でも、主に新聞資料をもとに浪花節芝居の興行記録の収集を行った他、興行関係に関わる文献資料を通じて、同地域の大正から昭和期の浪花節の動向の一端を明らかにした（論文 真鍋 2022）。一方でこれらの成果を通じて、九州地域での他のジャンルとの交流は、興行上では見えるものの、演者や演目における直接的な交流は、後述する大阪の興行状況などと比較した場合、それほど見出せないこともわかった。

俄については九州地域では特に肥後にわかを対象として現地調査で実演者への聞き取りを行い、その聞き取りにおいて、にわかと浪曲が共同で興行を行っていた実態が明らかとなった。これらの情報も含めて、九州地域における俄興行の実態についていくつかの成果を出している（論文 松岡 2022、口頭報告 松岡 2022）。大阪で行った俄の調査については、南河内地域で伝承される河内俄に着目し、上演形態に関する調査と併せて、俄の伝承者への聞き取りを行い、そこで得られた情報から浪花節芝居が俄の上演に少なからず影響を与えていることが明らかとなった。両者の関係は端的には演目内容が共通点としてあげられるが、それだけではなく、演者自身が浪花節芝居と同じように、浪花節などのジャンルを自ら部分的に取り入れた場合であったり、南河内地域を巡業していた大衆演劇の一座に地域の人々が演者に加わったり、大阪の市内から当地域に出向いた専門の役者や浪曲師との交流があったりと、様々な形で実際的な影響関係が見出された。（口頭報告 園田 2023）。こうした関係は音曲漫才との間にも現れている。

音曲漫才は特に浪曲漫才について調査研究を進め、文献資料での情報に加え、関連芸能の実演者や興行に関わる関係者への聞き取りを通じて、浪花節芝居あるいは俄に関連する喜劇との直接的な交流がいくつかの事例として確認出来た。それらは浪曲師が喜劇などに参入する場合、また逆に喜劇の役者が浪曲の芝居を取り入れる場合の双方にみられ、さらにその状況は昭和の後期まで続いていることが見て取れた。このことは本研究課題の中心的な課題である芸能間の交流を通じて大衆的な興行の実際的な繋がりが形作られていたことを端的に示したものと見える。

本研究課題では、浪花節芝居の隆盛を踏まえながら、その周辺として俄と音曲漫才（浪曲漫才）の動向に着目してきた。浪花節芝居の衰退の後に喜劇、さらにその後に浪曲漫才が現れるが、その実際的な繋がりは、特に、大阪の興行状況あるいはその影響を受けた、南河内の俄のなかに見出された。こうした状況は、これまでも演者個人の伝記などで個別的、断片的に伝えられてきたが、本研究課題は、大阪市内、郊外を含めた広い地理的領域を対象に捉えたものであり、今回得られた成果は、本研究課題が取り組んだ「音楽と芝居の文化」を軸とする近現代の興行史研究を包括的に捉える方法として、今後の研究進展の可能性を示すものになったと考えられる。

ただ、本研究での具体事例はその一部であり、今後も継続した調査が望まれる。一方九州では直接的な影響は見られないが、浪曲漫才の興行はやはり昭和半ばに多く確認できる（たとえば嘉穂劇場など）。そのように考えれば、大阪で確認できた芸能の影響関係は、そのままの状況で伝播の時差を伴いながら、九州にも展開した可能性が想定される。この点も、本研究課題において十分に考察できなかった部分であり、今後の課題として取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 真鍋昌賢	4. 巻 96
2. 論文標題 アーカイブの夢、地方からの照射 浪曲史の編み直しにむけて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アステイオン	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡薫	4. 巻 25
2. 論文標題 北部九州地方における芸人の興行活動 熊本県の俄（にわか）を事例に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 天理大学人権問題研究室紀要	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 2件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 園田郁
2. 発表標題 節劇にみる大衆芸能の地域受容
3. 学会等名 比較日本文化研究会2022年度研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松岡薫
2. 発表標題 地方で芸人として生きる ある肥後にわか師への聞き書きから
3. 学会等名 日本民俗学会第74回年会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 真鍋昌賢
2. 発表標題 問題提起 浪曲における巡業例をとりあげて
3. 学会等名 比較日本文化研究会2022年度研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 園田郁
2. 発表標題 日本統治下の台湾における大衆演芸の興行 タカマチとしての博覧会 -
3. 学会等名 日本統治下の台湾における歌舞伎・浄瑠璃史の構築――現地資料に基づく基礎研究と考察――（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真鍋昌賢
2. 発表標題 ケレン読み試論 大阪から考える浪花節史研究の課題
3. 学会等名 第102回浦江塾（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真鍋昌賢
2. 発表標題 明治期大阪における浮かれ節席の様相
3. 学会等名 比較日本文化研究会第3回小規模研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡薫
2. 発表標題 民俗芸能の演技と伝承 熊本県南阿蘇地方のにわかを事例として
3. 学会等名 おやさと研究所第340回研究報告会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡薫
2. 発表標題 俄を演じる人々 娯楽と即興の民俗芸能
3. 学会等名 京都民俗学会第335回談話会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡薫
2. 発表標題 俄にみるドラマ性とは何か 熊本県阿蘇郡高森町の俄から考える
3. 学会等名 日本 演劇学会2021年度研究集会パネル
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡薫
2. 発表標題 北部九州地方における芸人の活動実態 熊本県の俄(にわか)を事例に
3. 学会等名 天理大学人権問題研究室公開研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	真鍋 昌賢 (Manabe Masayoshi) (50346152)	北九州市立大学・文学部・教授 (27101)	
研究 分担者	松岡 薫 (Matsuoka Kaoru) (90824350)	天理大学・文学部・講師 (34602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------